

言語と認識のダイナミズム

ウィットゲンシュタインからクワインへ
Dynamics of Language and Knowledge:
From Wittgenstein to Quine



言語と

Dynamics

Dynamics

of Language

認識の

of Language

and Knowledge:

ダイナミクス

and Knowledge:

江苏工业学院图书馆

藏书章

Wittgenstein

to Quine

丹治信春

Wittgenstein

to Quine

ウィットゲンシュタイン
からクワインへ

勁草書房

著者略歴

- 1949年 大阪市に生まれる
1971年 東京大学教養学部教養学科卒業
1976年 東京大学大学院科学史・科学基礎論博士課程単位取得退学
現 在 東京都立大学人文学部助教授
編著書 『言語・科学・人間』（朝倉書店）
主論文 “Quine on Theory and Language”, *British Journal for the Philosophy of Science*, vol. 40, 1989. 「翻訳と理解」（『現代哲学の冒険』第5巻『翻訳』、岩波書店、1990年）など。
訳 書 B. C. ファン・フラーセン『科学の世界像』（紀伊國屋書店）、
P. ホーウィッチ『時間に向きはあるか』（丸善）など。

言語と認識のダイナミズム ウィットゲンシュタイン からクワインへ

1996年1月20日 第1版第1刷発行

著 者 たん じ のぶ はる
丹 治 信 春

発行者 八 田 恒 平

発行所 株式会社 けい そう
勁 草 書 房

112 東京都文京区後楽2-23-15 振替 00150-2-175253

電話（編集）03-3815-5277（営業）03-3814-6861

FAX 03-3814-6854

本文組版 日本フィニッシュ・ヒライ・和田製本

©TANJI Nobuharu 1996 Printed in Japan

* 落丁本・乱丁本はお取替いたします。

* 本書の全部または一部の複写・複製・転記載および磁気または光記録媒体への入力等を禁じます。

ISBN 4-326-15315-6

序

本書のテーマは、言語はどのような形で機能しているのか、言語を理解するとはどのような事態なのか、という問題、もう少し限定して言うならば、われわれの認識の営み（知る、考える、推測する、疑う、等々）において、言語はどのような形で機能しているのか、言語理解はどのような形で成立しているのか、という問題である。そして特に、認識が進展するというダイナミックなプロセスにおける言語の働き方、言語理解のあり方に、焦点があてられることになる。

この、認識の進展というダイナミックなプロセスにおける言語の働きという問題に関しては、今世紀の後半になって、まずはクワインが、衝撃的な〈発想〉を示した論文「経験主義の二つのドグマ」（一九五一年）において、その主題的な考察を開始し、その後、クワイン自身やパトナムなど、主にアメリカ（特にハーバード）の何人かの哲学者達が論じてきている。私が本書で最終的に目指すのは、彼らの路線を継承しつつ、さらにそれに対しても批判的な検討を加え、クワインの考えにある程度の構造化と修正を施すことによって、一つのダイナミックな言語・認識像を提示することである（第三

（五章）。

しかし本書ではその前に、ワイトゲンシュタインの言語観を取り上げて、それをかなり詳しく吟味する、という作業を行なう（第一・二章）。その理由は、もし「ダイナミックなプロセス」にまつわる問題を度外視するならば、ワイトゲンシュタインの考えは、深い〈洞察〉を示す極めて魅力的なものだ、ということである。しかし私の考えでは、意味の問題と事実の問題とを峻別し、「言語は規約に基づく」という考えを堅持する限り、まさにこの「ダイナミックなプロセス」というところで、ワイトゲンシュタインの考えは重大な〈限界〉を見せることになる。それゆえにこそ、ワイトゲンシュタインの考えと「ダイナミックなプロセス」とをぶつけてみることは、われわれが進むべき道を見出すための指針を得る上で、極めて有効な実験になる、と考えられるのである。そして、3・1節で見るように、ワイトゲンシュタインが晩年に提唱した「世界像」という考えは、クワインが「経験主義の二つのドグマ」で素描した言語・認識像と、ある面で顕著な類似性をもっており、その類似性を背景として両者を比較することは、様々な形で有益な示唆を与えてくれるであろう。

「ワイトゲンシュタインの限界」といういささか挑発的なサブタイトルをつけた第二章は、予想以上に長い章になってしまった。その原因は、次のことにある。特にわが国において、ワイトゲンシュタインが「きらい」な人々はただ彼を無視し、ワイトゲンシュタインが「好き」な人々はひたすら彼を「信奉」し、彼に「帰依」するという傾向が強く、したがってワイトゲンシュタイン「批判」の議論には場所がない、という感が強い。ワイトゲンシュタインに限らず、ある哲学説の研究が「哲学者

への帰依」〔柴田、1995〕、二二ページ）になるという傾向が、わが国では強いが、とりわけワイトゲンシュタインの場合には、おそらくは彼のもつ独特のカリスマ性のゆえに、イギリスにおいてもその傾向が見られるし、日本においては、必ずしも「帰依」しているのではないと思われる人々も、ワイトゲンシュタインの議論を、実際以上に強力なものと見てしまっているのではないかと思われるのである。例えば、2・4節の「規準／徴候の二分法的前提となっている考え」および「規準と偽りの外見」という見出しをつけた二つの小節で取り上げたワイトゲンシュタインの議論は、彼の哲学に関心をもつ多くの哲学者が、「かなり強力な（あるいは決定的な）議論」と考えているように思われる。そういった事情のゆえに、「ワイトゲンシュタイン批判」の議論はかなり周到に行なう必要があると考えたのである。そしてさらに、アメリカでは既に一九六〇年代から七〇年代にかけて、（私の観点から見て）的確なワイトゲンシュタイン批判が、パトナム、チハラ、フォード、ローティーといった人々によって行なわれていたが、それらもまた（少なくとも日本においてはほとんど完全に）無視されてきたので、とにかくもそれらの存在を日本の読者に伝え、記録しておきたいと考えた次第である。

本書において、ワイトゲンシュタインの考えに対する批判（第二章）と、クワインの考えを発展させる試み（第三、四章）とを通じて描き出し、擁護しようとしたのは、われわれの言語理解の基本的なあり方が、私が「体系の把握による理解」、「像を描くことによる理解」と呼ぶような形、すなわち、信念体系・理論体系のネットワークの中に様々な表現が位置づけられるという形での理解だ、という

ことである。そして、信念体系・理論体系自身は、歴史と共に変化するものであり、そのような歴史的な変化というダイナミックなプロセスのただ中でも、言語は連続的に「理解」され続けている。そのような「理解」のあり方を要約的に表現したのが、本書で「補償の原理」と呼ぶ原理である。そして、そのような「理解」のあり方が可能なのだ、ということ論ずるために、私は、「言語の同一性は推移律を満たさない」という、一見したところ非常識に見えるテーゼを擁護することになる（「推移律」については、第三章の注(16)を参照）。さらに、「補償の原理」に基づいて、ある種の命題を「分析命題」として特徴づけることができ、また、「補償の原理」を観察文に適用することによって、一種の「観察の理論負荷性」を、極めて自然な形で理解することができるように思われるのである（第四章）。しかし、「体系の把握による理解」という考えや、「言語の同一性は推移律を満たさない」という考えは、少々厄介な問題を惹き起こすように見える。そのような問題に答え（第五章）、最後に、もう一度ウィトゲンシュタイン的な考え方を振り返る（結語）ことで、本書は結ばれることになる。

さて、以上述べてきたような本書のテーマは、どういった分野に属するのだろうか。まずは「言語哲学」に属する、と言ってよいであろう。しかし同時に「認識論（知識の哲学）」にも属すると言えようし、また、「科学哲学」にもかなり深く関わっている。とりわけ、「体系の把握による理解」は、理論的な科学において典型的に見られるものであって、その意味で、科学的な認識とその進展のあり方が、重要な考察対象となるからである。（しかし私は、そのような言語理解のあり方は、理論的な科学の中だけでなく、もっと日常的な言語使用の中にもあるのだ、と主張することになる。）

本書は、かなり幅広い読者層を想定して書かれている。一方では、右に挙げた言語哲学、認識論、科学哲学といった分野の専門的な研究者の方々に、是非読んでいただきたい（そして、批評や反論をいただきたい）と思っているが、他方では、言語とか知識といった問題に多少なりとも関心をもつ、もっと一般的な広範囲の読者を想定している。つまり、私としては、できる限りわかりやすく、明晰に、予備知識なしに理解できるように、最大限の努力を払ったつもりである。哲学の本というのは、わけのわからない専門用語を並べ立てたものだ、という（かつては「常識」であった？）印象は、最近ではかなり薄まってきているように思われるが、そのような印象を破壊してしまいたい、ということが、本書における（そしてその他の場所においても）私の方針の一つである。「哲学は台所のことばで語らなければいけない」というのが、私の恩師である大森荘蔵先生の一貫した姿勢であり、私もそれに全く賛成なのである。

参考文献の指示の仕方については、巻末の「参考文献表」冒頭を参照していただきたい。引用文中の「」内は引用者による補足であり、引用文中の圏点は、特に断りがない限り、原文における強調である。

言語と認識のダイナミズム

—— ウィトゲンシュタインからクワインへ

目次

序

第一章 言語の成立基盤——ウイトゲンシュタインの洞察……1

1・1 なぜ言語が問題なのか……………1

1・2 ことばと〈もの〉との結び付き……………5

1・3 言語ゲームと文法……………14

1・4 ウイトゲンシュタイン的アプローチ……………21

デカルト的〈懐疑〉は可能か？／内的体験の不可謬性／

文法的対立

1・5 規則にしたがうということ……………37

第二章 意味の問題と事実の問題……………49

——ウイトゲンシュタインの限界

2・1 〈われわれの一致〉と〈ものの本性〉……………49

2・2	『断片』と『哲学探究』からの数節の検討……………	62
2・3	規準と徴候……………	72
	「規準」の標準的解釈／「規準」と「確実な知識」／ 「蓋然性は確実性を前提とする」か？／何人かの解釈者 に対するコメント／痛みのふるまいを惹き起こす病気／ 複数の規準間の対立・規準と徴候との揺れ動き	
2・4	世界像……………	109
	地球は私が生まれるよりずっと前から存在していた／ 『確実性の問題』とそれ以前の著作／「体系の把握」に よる理解／理論的な科学における言語理解／規準／徴候 の二分法的前提となっている考え／規準と偽りの外見／ 文法的規則としての世界像／まとめ	
第三章	全体論的言語・知識観——クワインの発想……………	147
3・1	「経験主義の二つのドグマ」……………	147

クワインの平等主義／言語における一致と安定性／信念
体系と経験とのつながり

3・2 言語の社会的性格 164

言語共同体のメンバー資格／言語理解と共有信念との相
互浸透／パピノーの考え／外延の同一性

3・3 言語の同一性 188

対話の円滑さ／言語の同一性は推移律を満たさない／
「補償の原理」／まとめ

第四章 「補償の原理」の展開 213

4・1 言語の社会的分業 213

4・2 分析命題——基準語と法則集約語 218

一基準語と分析命題／複数基準語・法則集約語／パトナ
ムの「独身ノイローゼ」／「原子」という語の変遷

4・3	観察文と観察の理論負荷性	245
	観察文の〈意味〉／観察の理論負荷性・刺激意味の改訂	
	／「補償の原理」の拡張／まとめ	
	第五章 問題点の検討	271
5・1	言語の習得可能性	271
5・2	非「推移性」と「言語共同体」概念	280
	方言系列における非「推移性」／複数の言語共同体への帰属	
	結 語	295
	注	307
	あとがき	331

目 次

参 考 文 献 表
索 引

第一章 言語の成立基盤——ウィトゲンシュタインの洞察

1・1 なぜ言語が問題なのか

われわれは日々、言語を使ってものごとを考えたり、ものごとを知ったりしている。そのとき、その、考えたり知ったりするというわれわれの営みの中で、言語はどのような働きをもっているのだろうか。この問題について、かつての哲学者達はかなり「へんき」な考えをもっていたように思われる。ここで「へんき」な考えと言ったものの典型的な例は、言語の役割についてのジョン・ロックの考えである。ロックによれば、言語の役割は「記録と伝達」に限られる ([Locke], III 9.1. Cf. *ibid.*, III 22.)。われわれが一度考えたこと、知ったことを、忘れてしまったときのために「記録」し、また、自分が考えたことを他人に「伝達」することが、言語の役割と考えられたのである。これはある意味で、自

然でもっともな考えだと思われるかもしれない。しかし、もしこの考えが正しいとすると、「記録」や「伝達」が行なわれる前の考えや知識は、言語なしに成立していたことになる。つまりこの考えでは、言語は、言語なしに既に成立している考えや知識に、後からかぶせられる「外被」にすぎない。ロックの考えでは、思考とは「心の中の観念」の操作であり、心の中で観念によって作られる「心の命題 (mental propositions)」こそが本当の「考え」であって、それに——ついでながら——「記録と伝達」のために外面的な表現を与えたものが、「ことばの命題 (verbal propositions)」すなわち言語表現に他ならない。それは、既にできあがっている「心の命題」を、単になぞるにすぎないのである。

だが、少なくともある程度複雑な構造をもつ「考え」を、言語なしに考えることができるであろうか。記録するためでもなく、人に伝えるためでもなく、まさに考えるために、われわれは言語を必要とするのではなからうか。たとえ口に出さず、「心の中」で考えるところとしても、既にわれわれはことばを操作している。この、ことばという記号の操作こそが、「考える」ということであり、そこで作られる言語表現 (記号の羅列)こそが、「考え」に他ならないのではないか。記録するのでもなく、他人に伝達するわけでもないとしても、いま私がどのようなことを考えているのかを自問するならば、それに対する答えは、「観念」の複合体を (心の中で) 指し示すことによってではなく、「かくかくしかじかのこと」と言語表現によって与えられる他ないのではなからうか。

私が出発点を使っているとき、言語表現と並んでさらに「意味」が私の心に浮かんでいるわけではない。言語そのものが、思考にとっての媒体 (das Vehikel des Denkens) なのである。(PU, I, 329; Cf. PU, I, 330-32.)

もし、「私には彼の与える記号しか見えないのに、彼が何を意味しているのかをどうやって知るのだ」と言う人がいるならば、私は、「彼もまた、自分の与える記号しかもっていないのに、自分が何を意味しているのかをどうやって知るのだ」と言おう。(PU, I, 504)

しかし、このような言い方に対しては、次のように反論したくなる人がいるかもしれない。「思考という(人間にのみ許された)〈精神作用〉を、単なる記号の操作として考えるのは、精神に対する冒瀆ではないのか。たしかにわれわれは、考えるときにことばを操作するが、〈考える〉ということそれ自体は、その記号操作のいわば背後で、われわれが〈精神的媒体〉によって執り行なうことなのだ。むしろその〈精神作用〉のおかげで、単なる記号にいわば初めて〈生命〉が与えられ、単なる記号が初めて意味をもつようになるのだ」と。実際、ロックのみならず従来の多くの哲学者にとって、これは言うまでもないほど明らかな「常識」であったように思われる。そして、このような考えに対して執拗に反駁を加えたのが、(後期の) ウィトゲンシュタインであった。その「ウィトゲンシュタインの洞察」については——私が理解した限りで——次節以降で少し詳しく見ることにするが、それが本書全体の考察の出発点となる。そもそも、「認識における言語の働き」が一つの〈問題〉となる